「会員短信 76」

## 「羊歯(しだ)御輿(みこし)への想い」　浜田京子

晩秋の肌寒さに重ね着をして、早朝のウォーキングに出かける。暁の静寂を劈くように雉子の啼き声が聞こえてくる。常の散歩道には、色付き始めた蜜柑畑の日々の変化が私の眼を楽しませてくれる。曼珠沙華は思いがけない場所に忽然と現れ、まるで悪女か遊女の如く咲き競う。万朶の白露に指先を濡らしながら大地の静かな営みを満身に感じる。

私の居住する愛媛県宇和島市吉田町知永地区では、十一月三日に「氏神様」の祭礼が執り行われる。この地区の最も誇りとする「羊歯御輿」がこの日の主役である。二、三日前から切り採った孟宗竹を火に炙りながら、曲げたり伸ばしたりしては御輿の枠を組み、葛で四隅をしっかり固定して形を造る。御輿全体を覆う羊歯の葉は、当日の早朝四時頃から山に採りに行く。露をとどめた羊歯の葉で覆われた御輿の天辺には、羊歯の葉で造られた鳳凰が、赤い唐辛子の実と新米の稲穂を口先にしっかり銜えて羽根を広げて美しく気高く輝いている。

この「羊歯御輿」を中学生の児童達が担いで、地区の一戸、一戸の門前で「ヨーイヤラサー」の掛け声と共に舞うのである。天辺の鳳凰がやさしく揺れる様子は、筆に尽くしがたい。

しかし、昨今の少子化で御輿を担ぐ子ども達が足りないとの課題に直面している。伝統ある羊歯御輿の今後を危惧しつつ、どうか末長く継承して欲しいと願って

露とどめ羊歯の御輿の化粧木舞

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。